

鳩木節子の後日
甘木数彦

第四章

—

翌日もその翌日も、夜中になると大勢の猫が鳴いた。商店街には昼間でも重苦しい緊張感が漂い、夜ともなれば人々は家に閉じこもるようになった。

そのくせ噂話はこれまで以上に熱っぽく、声を潜めて語られた。当然、うわさの変異と増殖と統廃合のペースは急勾配を描いてアップした。

節子は毎晩、町内を巡回した。あいかわらず化け猫は声ばかりだった。普通の野良猫さえどこかへ行ってしまったようだった。実体のない化け猫の襲撃もあつたりなかつたりで、一貫性がなかった。

攻撃が継続する時間もまちまちで、短いときは節子へたどり着く前に消えてしまうことさえあった。とはいえ、着実な変化もある。ここ数日、化け猫はぼんやりとしたシルエットを伴うようになっていたのだ。

まだ鮮明な像を結んでいないが、とうとう視覚に働きかけるようになったのだから、それがはっきりとした形となるのはもう間もなくのことだろう。

最初に遭遇したときと違って、節子は変身しなかった。出方さえ知ってしまえば、今のところは変身せずともあしらうことができたのだ。

猫が鳴いているあいだを除けば、巡回は単調だった。煌々と照らされる表通りから灰色の闇がわだかまる裏通り、そして再び表通りへと歩きながら、節子は化け猫のことや住人たちのことに考えを巡らせた。

噂に語られる化け猫は、どんどん猫という要素から遠ざかっていた。赤裸の蛙みみたいな皮膚をした化け猫などまだいいほうで、猫の頭のような肉腫に覆われた不定形の固まりに追いかけられた、という話さえあった。

それでもそれらは化け猫として物語られ、伝播していく。こうした話の大半を節子は香奈や汽一郎から聞かされた。別に他の人と交渉がないわけではない。商店会の人々もこのごろはずいぶん気安く節子へ話しかけてくるようになった。

しかしどういうわけか、節子へ化け猫の話をする人はほとんどいなかった。そこまでうち解けてはいないのだろう。節子はそう考えていた。

現実化を未然に防ぐ方法は一向に思い浮かばなかった。忠春も伊助も役に立ちそうな知識やアイデアは持っていなかった。特に封じ込めを行ってもいけないのに、外部へ拡散しないというのもこれまでの噂と違って不気味だし、これだけバリエーションを生みながら収束する気配もない。

もし噂がすべて事実なら、いまや町の人でそれを目撃していない者などおらず、そこら中に化け猫が溢れていることになってしまう。

一方で、コキドーハイツに住む人々のことも気がかりだった。最初は軽い雑談のタネだったはずのものが、いつのまにか「住人たちの過去を探る」というゲームのようになっている。

判っている限りでも「香奈がただの仮面屋ではない理由」「汽一郎と忠春の対立の理由」

「昭平の不自然さの理由」そして「謎の協力者とは誰か」。

化け猫と違ってこちらは放置してもいいのだが、それぞれの謎が微妙に関連しあっているような形で姿を垣間見せるせいで、気になってしかたがない。それに、そういった謎を放置したままで一緒に暮らすというのも落ち着かないことだった。

謎の協力者について、予想どおり忠春も伊助も正体を教えてくれなかった。

忠春は「そんな奴もいたが、死んだ人間を気にしてもしょうがない」と言うばかり。伊助は「正式な手続きもなしに機密は漏らせない」と答えるだけだった。

念のため香奈にも質問してみたが、成果はなかった。昭平についても同様に、誰も詳しいことを知らないようだった。

ただ昭平が忠春を理解者と呼んだのは本気だったらしく、忠春も昭平のことを「聡明かつ強靱な意志と遠大な視点の持ち主」と評していた。

どこをどう見ればそんな感想が出てくるのか節子には理解できなかったが、何かがあることは確かなようだ。そうしてみると「忠春と昭平が互いを評価する理由」もまた、謎の一つに加えられるだろう。

何の支援もなく、あらゆることが行き詰まっている。それなのに自分は夜の町内をフラフラするしかやることがない。節子はそんな現状が歯がゆかった。

無気力は発作のように、ときどき節子の中で急激に高まっては消えていった。人工の光と自然な闇の中をいくつもくぐり抜けながら、節子はなおも考える。

そもそも噂というのは奇妙なものだ。人々のあいだを感染しながら増え続け、変異を繰り返す。やがて力を持ち始め、実体がなくても実体があるのと同じような影響を人々に及ぼす。

本当は化け猫が現実化する必要もないのだ。人通りの絶えた商店街を見渡せば、これ以上化け猫が現実化したところで変わるなどないように思える。現実化したところで襲える人もいないし、今までの経緯からすると、この地域の外へは出られない可能性も高い。

昭平が言っていたように天国も地獄も、そしてゆびぬき通日も、行き止まりに変わりはない。ゆびぬき通りの寂れた側の入り口に「ヌケラレマス」とあったことを思い出し、節子は唇をゆがめて笑う。

噂といえば、あれほど変わり者ばかりのコキドーハイツの住人たちになんの噂もないのはおかしい気がした。もちろんこれも化け猫と同じく、周囲の人が教えてくれないだけかもしれない。とはいえ、知ってしまえばそれはさらにゲームをややこしくするばかり、という可能性もある。

通り抜けられそうにない思考の路地を歩んでいると、無性に目に見える敵が欲しくなった。何も考えず、ただ倒せばそれで解決できるという明快さ。香奈には悪いが、現役の時だって噂が現実化する前に封殺できたことなど一度もない。

人の口に戸は立てられないもの。それならいっそのこと、今すぐにでも現実化してくれた方が楽だ。今なら、化け猫が実体化しても被害者は出ない。

むしろ積極的に化け猫の現実化を促せないか。そんな考えを抱くようになるまで、たいして時間はかからなかった。実体化する場所と時間さえ気を付けていれば、それが最も早い解決につながる。

とはいえ、方法が判らない。名前を付けてみる。うわさ話を口にしてみる、呼びかけて

みる。猫たちが鳴き騒ぐ短い時間のあいだに、節子は思いつくことをあれこれと試してみた。しかし、成果は上がらなかった。

働きかけを始めてから四日目のこと。いつものように巨大な化け猫の一撃をかわした節子は視界の端で、いくつもの淡い影が揺らいでいることに気付いた。他の化け猫も、巨大な化け猫と同じくらいに現実化しつつあったのだ。襲ってくる方に気を取られるあまり見落としていたらしい。

以前なら考えられない不注意ぶりに節子は軽く落ち込み、同時に焦りを覚えた。もし、うわさ話のバリエーションの数だけ化け猫が現実化してしまったら、節子にも收拾がつかなくなる。

翌日、節子は思いきって香奈に相談してみた。前に叱られたせいで、なんとなく言い出せずにいたのだ。

話を聞き終えた香奈は少し考えてから、口を開いた。

「発想としては悪くないんじゃないの？ それなら被害は出なさそうだし、予想も付かないようなタイミングで現実化されるよりはマシ。それにさ、あの鳴き声。早く終わらせてくれないと寝不足で」

節子はうなずく。あの鳴き声はかなりの騒音だ。長い時間ではないが、それでも寝ているところを起こされると睡眠のリズムは乱されてしまう。ただでさえ不穏な予感で張りつめた人々に、寝不足はよけいな消耗を加えていた。

それから二人は、あらためて化け猫について解っていることや考えたことを紙へ書き出してしてみた。それを元にいい手はないものか検討する。

やがて、節子は一つの可能性に思い至った。それは香奈に話せば止められそうなアイデアだ。だから節子は黙っていた。そして結局、それ以外に有効そうなものはどちらからも出てこなかった。

その晩のこと。節子はいつものように町内を巡回していた。ただし、変身している。奇異な体が人目に付かないよう、節子は暗がりから暗がりへと足音を忍ばせて歩む。やがて猫が鳴き出す。いつものように重たく、海鳴りのようなうねりを帯びている。

遠くから足音が接近してくる。足音の主を引き離さぬよう、追い付かれぬよう、間合いを取りながら節子は移動を開始した。化け猫が途中で消えたりしないか。それだけが気がかりだった。

目的地は狭い路地がひときわ錯綜している一画。四方をレンガ壁に囲まれた工場跡の空き地だ。壁の前にはU字ブロックやスチールロッカーの残骸などが積み上げられ、子供でも乗り越えられるようになっている。

節子は助走を付けて壁を飛び越えると、野ざらしになった機械や資材がわずかに残る空き地の中央で化け猫を待った。

幸いにも化け猫は消えなかった。壁の向こうで足音が地を蹴り、着地と同時に節子へ詰め寄る。

節子はわざと、左腕だけを化け猫の前へ投げ出すようにしながら身をひねる。見えない化け猫の一撃を受け、節子の左腕は跳ね上げられる。

それこそが、節子の考えたアイデアだった。わざと傷つけられることで己の体に化け猫の痕跡を刻ませ、その痕跡を通して存在を世界にしっかり固定する。上手くいくかはわか

らなかったが、試してみる価値はある。

節子は化け猫から跳躍して離れると、様子を見守ろうとした。そこで左腕が無傷であることに気付く。変身した節子の皮膚を裂くほどの力が、化け猫になかったのだ。完全に現実化していないからかもしれない。

しかたなく、節子はその場に立ちつくす。化け猫はすぐさま駆け寄り、無防備な節子を襲った。

肩、腹、頭、背中。どこが攻撃されても節子は傷つかない。せいぜい、少しよろめくくらいだ。節子の中に焦りが生まれる。少しでも傷つけやすいように、わざと皮膚の弱そうな部分を差し出す。それでも上手くいかない。

生身の状態ならともかく、今の節子を傷つける力はまったくないらしかった。致命傷を負う危険を覚悟して変身を解こうか。そう考え始めたときだった。

「大丈夫か!？」

声がしたかと思うと男が壁の上から飛び降りて、節子たちに向かって近付いてくる。汽一郎だ。どこで買ってきたのか、両手持ちの大きなハンマーをたずさえていた。真新しい先端がところどころ、月光を受けて白く見える。

「来ないで！」

節子は叫ぶ。猫の足音が汽一郎へ駆け寄る。ハンマーを構える汽一郎。しかし、無理があった。

節子が止める間もなく汽一郎は最初の攻撃をもろに受け、吹き飛ばされる。ハンマーが真下へ落ち、青草に受け止められて鈍い音を立てる。

汽一郎を殺したという事実が、逆算して化け猫の存在を支える。変化はすぐに現れた。空気の一部が不透明になり、漠然としたシルエットが収束して明瞭さを増していく。

実在となった化け猫は、ただの巨大な猫ではなかった。毛皮は全くなく、顔は胎児のものを無理に猫の頭へ張り込んだようだった。胸から腹部を通して後脚のあいだにかけて、普通サイズの猫の脚が無数に生えている。猫の脚はバラバラに宙を搔いていた。

節子は汽一郎に視線を走らせる。地面に投げ出された汽一郎は胸から腹までを、服も皮膚も区別なく切り裂かれ、圧力の弱まった血がしまりなく染み出していた。おそらく助からないだろう。

節子は短く舌打ちをするだけで汽一郎を意識から追い出し、化け猫に注意を戻した。

ボァオオウウ

化け猫が吼えた。節子の方へ一歩、踏み出す。白っぽくのっぺりとした皮膚の下で、不自然に絡まり合った筋肉がうごめく。

いままでの経緯がなければ、それは怪獣と呼んだ方がふさわしかっただろう。これまでの任務の中で、これほど怪獣らしいものを相手にしたことはなかった。

いったいどんな馬鹿げた技術がこの怪物を可能にしているのだろう。組織を支えているのは情報技術だ、という伊助の言葉を思い出す。それが何なのかは知らなかったが、たいそう便利なものに違いない。

先に動いたのは化け猫の方だった。背をたわめ、節子めがけて飛びかかってくる。さっきよりも速い。かろうじてかわした目の先を、爪がかすめていく。

強大な脚が慣性を殺している間に、節子は相手の懐へ飛び込むと拳をふるった。剛拳は

猫脚を粉碎しつつ、胸にめり込む。見えない部分まで生物である証拠に、大量の血が噴き出す。化け猫は後脚で立ち上がり、前脚で節子を叩き殺そうとした。そのころにはもう、節子は安全なところまで後退していた。

弱い。そう思うと気が楽になった。見かけこそ派手だが、力でも速さでも技量でも、化け猫は節子に及んでいなかった。

猫は怒りと衰弱に瞳を曇らせ、節子を見た。胸からの血が、苦痛に乱舞するたくさんの猫脚の先から地面にしたたり落ちる。

化け猫が駆け寄ってくる。節子はいかす。化け猫はそのまま走り去り、壁の手前で勢いを殺すことなく反転し、ふたたび節子へ突進してくる。節子も化け猫へ向かって走ると不意に身をかがめ、次いで立ち上がりながら全身の力を乗せて拳を突き上げた。その一撃は狙いどおり化け猫の下アゴを貫通し、上アゴを砕いて頭頂にまで達した。

節子の腕は肩口まで化け猫の体内に埋まる。避けようもない血流が節子の灰白色の体へ降りかかる。

化け猫は何度か痙攣すると節子もろとも倒れ込み、動かなくなった。化け猫の下敷きになった節子は苦勞して右腕を化け猫の頭から抜くと、外へ這い出た。

絶命した化け猫の前で、節子は自分の体を見下ろした。血まみれで気持ちが悪い。右手で左腕を撫でると、まるでローションのようだった。

濃厚な血の臭いに嗅覚が麻痺している。ぼんやりとしたまま節子は腕を撫で回し、血の感触を味わった。それからようやく頭をめぐらせ、汽一郎を眺めやった。

汽一郎はさっき見たままの姿勢で血だまりに浸っている。戦いが済んで気がゆるみ、ようやく節子は恐慌状態に陥った。

自分が一方的にやられていると勘違いして、汽一郎は命を落としたのだ。いくら久々の戦いだからといって、普通の人間が近付いてくるのを察知できなかった自分のふがいなさを悔やむ。それと同時に、起きてしまったことの重大さで吐きそうになる。

二つの死体のあいだで、節子は立ち尽くしていた。これからどうしたらいいのか、まったく解らない。ただ、汽一郎の死を周囲の人々へ隠蔽したくてたまらなかった。

と、汽一郎の胸がゆるやかに上下したようだった。節子は汽一郎のそばへ走り寄る。間近で見ると間違いない。汽一郎は呼吸をしていた。それどころか、胸の傷も消えている。

「んん。お、おおおあああ、あ」

うめきながら汽一郎は目を開け、体を起こした。節子を見上げる。目が合った。意識が定まらないようで、汽一郎の目は焦点がはっきりしなかった。節子も混乱しきっており、その視線は鈍い。

汽一郎が先に我に返った。

「大丈夫、だったみたいだな」それから周囲を見渡し、化け猫の死体を見付ける。「勝ったのか」

またうめきながら立ち上がる。

「おい。しっかりしろよ。って言っても無理か」

汽一郎はためらうことなく節子の両肩に手をかけると、名前を呼びつつ揺すった。

「あの、死んで、え？」

ようやく節子は声を出す。

「だから言ったろ？ 俺は不死身なんだよ。そんなことより」

汽一郎は急に膝からくずおれそうになる。節子は慌てて体を支えた。

「短期間に二回もだ。さすがにちょっときついな」

節子の腕の中でそう言うと、汽一郎は目を閉じた。すぐに規則的な息遣いが聞こえる。

気絶しただけのようだった。わけがわからないまま節子は背中に汽一郎を背負うと、コキドーハイツ目指して歩きはじめた。

背中越しに汽一郎の血が染みってくる。気持ちが悪いとは思わなかったが、ともかく痒くなってきた。節子は足早に通りを駆ける。二人のあいだに溜まった血が、湿った音をたてた。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>